

■監修 青木 茂

国際版画美術館館長・文星芸術大学教授

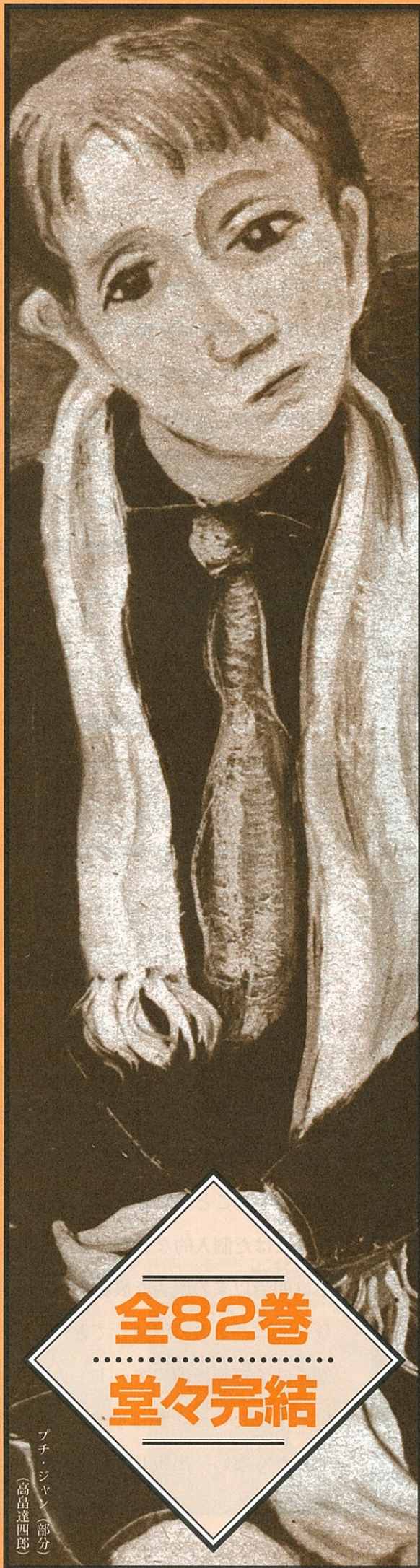
■編纂

独立行政法人 文化財研究所

東京文化財研究所

一水会
烏合会
槐樹社
観古美術会
光風会
国画会
国画創作協会
国民美術協会
自由美術家協会
春陽会
一九三〇年協会
草土社
太平洋画会
独立美術協会
内国絵画共進会
二科会
日本自由画壇
日本南画院
日本美術協会
白日会
白馬会
美術作家協会
美術文化協会
フユザン会
无声会
明治美術会

ゆまに
書房 YUMANI
SHOBOU



ブチ・ジャン（部分）
（高島達四郎）

全82巻
.....
堂々完結

◎明治初期から戦前まで

全国に散逸した美術展資料を集成。

近代 日本 アート・カタログ・コレクション



少女（部分・林武）

私たちが美術史を研究するとき、美術作品を考えるとときに直面して困るのは、その時代にどの作品が大切に思われていたか・その作品が何時人々の眼に触れ愛護され始めたかが、ほとんど不明なことである。古くは大名物以下の目録や茶会記があり、明治以来は売立目録がある。しかし、近代になって一般の人々が参観した展覧会に何が出品されていてどのように評価されていたかを知るてだてはほとんどないというのが実情である。

調べてみると明治初年来の美術関係展覧会出品目録は意外に多く出版され、鑑審査後には責任をもって審査評語を付した目録も印刷されているものである。またその図録も木版、写真石版、金属凸版、写真版と印刷の歴史をそのままに反映させて数多く出版されている。ただしこれらは出版部数がごく少数で関係者に配布され会場で販売されるものであり、展覧会期が終ればほとんど必要のないものとされてきた。図録は「カタログ」と呼ばれ出版事項があいまいなために商品カタログと同一視されて図書としての扱いさえ受けられないできた。

今日では稀覯に属するこれらの、列すれば観古美術会、絵画共進会、明治美術会から太平洋美術会といった展覧会の出品目録や図録を集めて見ると、古美術から同時代美術までの作品を私たちの祖父・曾祖父がどのように評価して日本美術史を構想し、同時代美術史を構築して来たかが瞭然とするようである。美術史論によって僅かな作品を評価するのではなく、膨大な量の作品によって新しい美術史を構想することができるようである。

はなはだ個人的な感慨になるが、美術関係者の共通認識のために、私は明治以来の膨大な展覧会出品目録・図録の復刻を夢想し、その量ゆえにただちに絶望してきた。ところが、ゆまに書房は現代の先端をゆく複製技術でアート・カタログをコレクションして江湖に提供しようという。私はゆまに書房の経営や採算のことは知らない、知りたくない。出版してさえくれれば、うれしくありがたく思うばかりである。

一水会 いっすいかい (082収録・全1巻)

帝国美術院会員となり二科会を退会した、石井柏亭・山下新太郎・有島生馬・安井曾太郎・谿伊之助・小山敬三・木下孝則・木下義謙の8名により、昭和11年(1936)12月に創立。のちに安宅庸雄・池部鈞・高野二三男・田崎廣助・中村善策、彫刻の藤川勇造が加わった。「会場芸術を非とし、技術を重んじ、高雅なる芸術を尊重すること」を提唱し、12年12月に第1回展を東京府美術館にて開催する。第7回展をもって戦争激化のため中断するが、戦後は昭和21年(1946)に第8回展を開催し活動を再開、現在に至る。

鳥合会 うごうかい (028収録・全1巻)

鍋木清方をはじめとした水野年方門下などの浮世絵系の絵師たちが集って新しい風俗画を生むための真摯な活動を続けた研究団体。明治34年(1901)に山中古洞の命名により発足。会員は鍋木清方・都筑真琴・山中古洞・鯨崎英朋・大野静方・河合英忠・高田鶴仙・福永耕実の8名、のち山村耕花・池田輝方・竹田敬方・吉川霊華らが参加する。34年6月、日本橋上横町八重洲館で発会式をおこない、第1回展を開催。同年9月日本橋万町の常盤木俱樂部で第2回展を開催し、以後45年(1912)まで毎年展覧会をおこなった。

槐樹社 かいじゅしゃ (074収録・全1巻)

大正13年(1924)、斉藤与里・田辺至・吉村芳松・油谷達・金井文彦・高間惣七・熊岡美彦・金沢重治・牧野虎雄・大久保作次郎・奥瀬英三ら、帝展で活躍していた若手作家によって結成。昭和6年(1931)12月の解散まで毎年公募展を開催し、機関誌『美術新論』(斉藤与里主幹)を発行するなど、帝展の衛星的存在として洋画界に大きな足跡を残した。

観古美術会 かんこびじゅつかい (005~007収録・全3巻)

『観古美術会』は、内務省博物館により開催された。博覧会事業と、それに絡む欧米でのジャポニズムの購入力をあてこんだ輸出を前提とした古器物保護および殖産興業政策の一環であった。しかし、明治13年(1880)に第1回展が開かれたその翌年、14年(1881)の第2回展から明治19年(1886)の第7回展(最終回)までは、この官設の美術展は、日本で最初の私設の美術団体である『龍池会』に継承されることになった。私設とはいいながら、国家の経済を賭けた政治性の強いその活動は、19世紀末の日本とヨーロッパの美術産業事情を映し出す鏡といえよう。

光風会 こうふうかい (029~033収録・全5巻)

明治45年(1912)、前年解散した白馬会の会員であった中沢弘光・山本森之助・三宅克己・杉浦非水・岡野栄・小林鐘吉・跡見泰の7名によって発起された美術団体。同年6月第1回展を上野竹之台陳列館で開催。創立会員7人は黒田清輝の弟子で、その後も小林萬吾・南薫造・辻永など白馬会系の画家たちが会員となった。外光派風の穏健な作風が主流を占める。絵画部、工芸部があり毎年春に公募展をおこなった。

国画会 こくがかい (062~064収録・全3巻)

国画創作協会の第1部(日本画)解散後、第2部(洋画)と彫刻部・工芸部は国画会と改称して活動を継続し、昭和4年(1929)に最初の公募展を開催。第2部併設以来の回数を追い国画会第4回展とした。その際に高村光太郎・椿貞雄・浜田庄司・バーナード・リーチらが会員として参加した。昭和6年(1931)には平塚運一を中心として版画部、同14年(1939)には野島康三・福原信三により写真部を新設した。同年彫刻部全員が退会するが、戦後、38年(1963)にS・A・S(彫刻家集団)の全委員が合流して再開された。現在も絵画・版画・彫刻・工芸・写真の5部門を擁して、毎年春に公募展を開催している。

国画創作協会 こくがそうさくきょうかい

(060~061収録・全2巻)

文展の曖昧な審査基準等への不満から、京都市立絵画専門学校の同窓生で若手の小野竹喬・土田麦僊・村上華岳・野長瀬晩花・榊原紫峰の5名により、大正7年(1918)に結成。「国画創作協会宣言書並二規約」を発表、鑑査顧問に竹内栖鳳と中井宗太郎を迎え第1回展を京都と東京で開催、その折に入選した入江波光が同人となる。大正15年(1926)に梅原龍三郎・川島理一郎、昭和2年(1927)に富本憲吉・金子九平次を迎え、それぞれ第2部(洋画)と、工芸部・彫刻部を新設。しかし文展に代わる帝展の創設や協会組織の運営上の問題等により、母体の第1部(日本画)が昭和3年(1928)に解散した。

国民美術協会 こくみんびじゅつきょうかい

(056~059収録・全4巻)

明治44年の白馬会解散後、「美術家共通の利害問題を処理すべき一大機関」とするべく、フランスのソシエテ・ナショナル・デ・ボザールに倣い、松岡壽・小山正太郎・黒田清輝(初代会頭)・岩村透らを中心として大正2年(1913)3月に創立。洋画部のほかに、彫塑・建築・装飾美術・日本画・学芸部が順次組織された。国民美術協会展の開催とは別に、「仏蘭西現代美術展覧会」や松方幸次郎のコレクション展(「松方氏蒐集 歐洲綴織及絵画展覧会」)等を主催し、さらに大典記念美術館建設を東京府に建議、また帝展への工芸部門新設を積極的に働きかけるなどした(大正14年[1925]に東京府美術館着工、昭和2年[1927]に帝展第四部工芸が開設)。大正12年(1923)12月には、機関誌『国民美術』(『美術月報』の改称)を創刊した。

自由美術家協会 じゆうびじゅつかきょうかい 美術作家協会 びじゅつそうさくかきょうかい

(073収録・全1巻)

昭和12年(1937)2月、長谷川三郎・浜口陽三・大津田正豊・津田正周・村井正誠・荒井龍男・瑛九、国画会会友を辞した矢橋六郎・山口薫を会員とし「純粹にして積極的な美術家の大同団結により、各人の芸術の自由なる発展と時代の芸術精神の振興とを期す」ことを掲げ自由美術家協会を創立。第1回展を同年7月に日本美術協会で開催した。昭和15年(1940)、戦



四季(杉全直)



驟雨(金子博信)



画室にて(木下孝則)

時色の深まりの中で自由の名が不適當とされ、美術創作家協会と改称、難波田龍起・小野里利信・森芳雄・中村眞等が加わった。戦後旧名に復して、昭和21年（1946）に第9回展を開く。昭和25年（1950）に抽象系の作家が退会してモダンアート協会を創立、39年（1964）麻生三郎ら十数名が退会するに伴い、自由美術協会と改称した。

春陽会 しゅんようかい （048～051収録・全4巻）

大正11（1922）年創設の美術団体。日本美術院洋画部を退会した小杉放庵・森田恒友・山本鼎らが、梅原龍三郎・岸田劉生・木村莊八・中川一政、さらに石井鶴三・萬鉄五郎らを迎えて結成された。翌年（1923）5月、第1回展を上野公園竹之台陳列館で開催。のち、斉藤与里・山脇信徳・小山敬三・林俊衛・長谷川潔・鳥海清児・岡鹿之助らも加わった。昭和3（1928）年の第6回展からは、山本鼎が日本創作版画協会の設立に関わったことから版画室を設置し、長谷川潔を会員に迎えた。昭和4（1929）年には春陽会洋画研究所を開設、全国各地で夏季洋画講習会を開催し、機関誌『イーゼル』を発行するなど後進の育成にあたった。研究所は昭和12（1937）年に閉鎖するが、昭和18（1943）年に春陽会教場を発足して活動を再開した。二科会に次ぐ歴史を持つ団体であり、現在は絵画部・版画部の2部制を取り、毎年春に公募展を開催している。

一九三〇年協会

せんきゅうひゃくさんじゅうねんきょうかい （074収録・全1巻）
ミレー、コロー、ドーミエらの1830年派に倣い、大正15年（1926）に在仏中親交のあった前田寛治／佐伯祐三／里見勝蔵に、木下孝則と小島善太郎の5名で組織。同年に京橋区北横町日米信託ビル階上で第1回展を開催、フォービズムの作風を基調とし、第5回展まで開催。昭和5年（1930）独立美術協会が創立すると、会員の大半が同会に加わり解散した。

草土社 そうどしゃ （034～035収録・全2巻）

フュザン会を引きつぐ洋画団体。大正4年（1915）岸田劉生を中心とする「現代の美術社主催第一回美術展覧会」（銀座、読売新聞社）が開催され、これが草土社の第1回展となった。同展の同人は劉生の他、中川一政・河野通勢・木村莊八・椿貞雄ら11名。5、6年（1916～1917）には春秋2回展覧会を開催し、第2回展からは劉生を中心とした同人と社友だけの展覧会としての性格を持つようになる。4回展頃に「内なる美」を求める、劉生の作品に代表されるような草土社風の作風がほぼ確立された。7年（1918）以後毎年1回展覧会を開催したが、大正11年（1922）の9回展を最後に自然解消した。会の主要な作家は、同年の春陽会創立に客員として参加している。

太平洋画会 たいへいようかい （009～012収録・全4巻）

会頭などのいない年齢も若い30名の作家のみによる美術団体。構成は旧通常会員から石川寅治・都鳥英喜・吉田博・丸山健作（晩霞）・満谷国四郎・新海竹太郎ら15名、旧準通常会員から石井満吉（拍亭）・大藤次郎・中川八郎・長尾黙・庄野宗之助ら10名、まだ会員ではなかった磯部忠一・高村真夫・藤島英輔ら5名であった。第1回展を上野公園第五号館において開催。明治37年（1904）、谷中清水町に洋画研究所を開設、昭和4年（1929）に太平洋美術学校と改称。初代校長に中村不折を推し、官立美術学校に対抗した在野における唯一の存在として幾多の英才、鬼才を洋画壇に送り出した。昭和2年（1927）2月第23回展を東京都美術館にて開催。以

来休むことなく同館にて開催を続け今日に至っている。

独立美術協会 どりつびじゅつきょうかい

（075～081収録・全6巻）

昭和5年（1930）11月に二科会を脱退した里見勝蔵・児島善三郎・林重義・林武・川口軌外・小島善太郎・中山巍・鈴木亜夫・鈴木保徳に、三岸好太郎（春陽会）・高島達四郎（国画会）ほか伊藤廉・福沢一郎・清水登之が参加し結成。様々な画風の作家があつまるが、一般的には「日本的フォービズム」を基調とする印象をあたえた。創立の翌年（1931）1月には東京都美術館で第1回展を開催。二科会とともに在野の有力団体として、現在も活動を継続している。

内国絵画共進会 ないこくかいがきょうしんかい

（001～004収録・全4巻）

明治政府は、明治6年（1873）のウィーンの万国博に参加し成功を納めた。この経験から、政府は、産業政策の一環として、伝統美術の振興を奨励。『内国絵画共進会』は、衰退した日本美術を振興するために創設された官催の日本画展である。太政官令第十三号により、明治15年（1882年）10月1日～11月20日と、明治17年（1884年）4月11日～5月30日）の2回、農商務省を中心に東京上野公園に於いて開催された。15年のフェノロサの講演（『美術真説』）をもって洋画の出品拒否を決定した、文字通り国画のための展覧会であった。『内国絵画共進会』は、伝統的日本画の復活をめざし、各地に孤立分散していた各流派の相互交流などにより、新しい時代を迎える起動力となった。

二科会 にかかい （036～047収録・全12巻）

大正3年（1914）創立の美術団体。文部省美術展覧会第1部（洋画部門）を、第2部（日本画）と同じように新旧二科に分ける運動が大正3年に起こったが、当局に受け入れられず、在野団体として設立された。同年10月第1回展を開催。石井柏亭・津田清楓・梅原龍三郎・山下新太郎・小杉未醒・有島生馬・斉藤豊作・坂本繁二郎・湯浅一郎・安井曾太郎・森田恒友・政宗得三郎・熊谷守一・中川紀元・小出樽重・黒田重太郎・古賀春江・児島善三郎・里見勝蔵・東郷青児・国吉康雄・藤田嗣治・北川民次らが参加し、新傾向作家を擁する代表的美術団体として活動した。しかし、会員の出入りが多く、昭和5年（1930）の独立美術協会、昭和11年（1936）の一会会、昭和13年（1938）の九室会、昭和20年（1945）の行動美術協会、昭和20年（1947）の第二紀会（後に、二紀会と改称）、昭和30年（1955）の一陽会などが分離独立することになる。大正8年（1919）に彫刻部、昭和20年（1945）に工芸部・理論部、昭和26年（1951）に漫画部・商業美術部、昭和28年（1953）に写真部を新設し活動範囲を拡大。現在は、絵画部・彫刻部・商業美術部・写真部の4部からなり、毎年秋に公募展を開催している。

日本自由画壇 にほんじゆうがだん

（065～067収録・全3巻）

大正8年（1919）11月、厳選な審査が問題となった帝展第1回展開催を契機に、南画家の池田桂仙が中心となって京都在住の画家16名（井口華秋・伊藤小坡・猪飼嘯谷・上田萬秋・植中直斎・小村大雲・水田竹園・庄田鶴友・加藤英舟・林文塘・西井敬岳・渡辺公観・高山春凌・玉舎春輝・広田百豊）により結成された。『芸術ニ於ケル同ジク凡テノ行動ニ何等拘束ラ



菩薩像（中川紀元）



途上（川西英）



良宵（人見少華）



雪国の人々（藤井一良）

受クル処ナク」発表することを目的とし、翌9年（1920）に第1回展を京都・東京で開催、以降毎年開催するとともに臨時に試作展を開き、公募鑑査のうえ陳列した。昭和17年（1942）まで存続した。

日本南画院

にほんなんがいでん（068〜072収録・全6巻）

京都南画界の青年画家研究団体として水田竹圃・河野秋邨・三井飯山らにより、田近竹邨・山田介堂・池田桂仙の三元老を迎え、富岡鉄斎・長尾雨山・内藤湖南を顧問として、大正10年（1921）3月に結成される。まもなく矢野橋村（大阪）・小室翠雲（東京）も参加し、東京・京都・大阪の南画界の提携が成った。「形式格式に拘束されざる真の南画的芸術精神に立脚したる作品」を理想とし、毎年1回展覧会を開催することとした。同年10月に第1回展を京都で開催して以降、昭和11年（1936）の第15回展まで継続したが、同年9月新文展参加問題について分裂、解散を決定した。昭和35年（1960）再興、現在に至る。

日本美術協会

にほんびじゅつきょうかい

（016〜025収録・全10巻）

明治20年（1887）、有栖川宮熾仁くたるひと親王を総裁として、その前身である龍池会（『観古美術会』解説参照）から日本美術協会と改名。明治政府の勸業政策を後押しすべく発足した半官半民の組織であった。「日本美術協会規則」の第一条に「本会ハ広く優逸ナル新古美術工芸品ヲ採集陳列シテ公衆ノ観覧ニ供シ、以テ美術ノ進歩ヲ促ス目的トス」とあり、美術展覧会が協会の重要な活動であった。立派な古美術を示して当時の作家たちにその技を磨かせるという目的のもと、新製品と古製品とを比較対照し、あわせて新製品の優秀なものに褒賞を与えていた。そのスポンサーが農商務省であったが、明治24年（1891）から宮内庁の助成金が毎年下賜されるようになると事業が拡大し、年2回の展覧会のほかに、青年美術家と美術工芸家の育成事業などを強化している。

白日会

はくじつかい（052〜055収録・全4巻）

光風会の主導者であった中沢弘光と、フランスのサロン・ド・トンヌに入選を果たすなどしていた川島理一郎が中心となり発足。創設メンバーは、光風会・太平洋画・二科会・日本美術院系などの作家たちであり、一派に偏らない、所属団体以外での研究発表の場となった。設立の年に第1回展を開催（三越呉服店・日本橋）、第2回展から一般公募の規定を設け東京府美術館にて毎年開催、合わせて小品展や、昭和7年（1932）には朝鮮総督府教育会後援で白日会朝鮮展覧会（京城府）を開催するなどしている。終戦の翌年には復活第1回展を呼びかけ第22回展を開催し、戦後は伊藤清永を中心に発展した。会は絵画部と彫刻部から成り、毎年公募展を開催して現在に至っている。

白馬会

はくばかい（013〜015収録・全3巻）

明治29年（1896）発足。発会の話は、5月に山本芳翠・小山正太郎・黒田清輝・久米桂一郎の間で起こり、同6月の神泉亭の会合には森鷗外・高山樗牛・大橋新太郎のほか明治美術会の主要な会員であった松岡寿・長沼守敬らの姿があったという。黒田・久米・岩村透らの帰朝者を中心としたこの会は、自由で平等な気の置けない会という本人たちの意識とは別に、モティーフや色調などに新風をもたらし、展覧会の会場設営に新機軸を打ち出し、美術家だけによる自由で平等な団体をかたちとして示すなど、当時の画壇に新しい「美術」概念をもたらした。また、美術を社会の中で認知

させ、美術家・芸術家は社会通念から自由に自立して自己表現をするものである、という芸術家像を創り出すなど、白馬会の意義は美術の枠にとどまるものではなかった。

美術文化協会

びじゅつぶんかきょうかい

（083収録・全1巻）

昭和14年（1939）5月、「正しい美術文化の在り方を構想し、具現すること」を目的として、独立美術協会を退会した福沢一郎を中心に、麻生三郎・古沢岩美・糸園和三郎・小牧源太郎・寺田政明・吉井忠ら、独立や二科会の前衛傾向の作家41名により結成。同年8月に機関誌『美術文化』を創刊、翌昭和15年（1940）4月には第1回展を東京府美術館にて開催した。戦争の激化と文化統制のため弾圧を受け、昭和19年（1944）の第5回展で活動を中断する。戦後は昭和21年（1946）に第6回展をもって活動を再開、現在に至る。

フュウザン会

ふゅうざんかい（034〜035収録・全2巻）

大正元年（1912）結成の洋画の美術団体。岸田劉生・斎藤与里・清宮彬の発起で組織され、大正元年10月銀座読売新聞社楼上で第1回展を「ヒュウザン会」と称し開催。太平洋画会の青年グループ、葵橋洋画研究所、アブサント会同人など、後期印象派やフォーヴィスムの影響を受けた青年画家を中心に168点が出品された。主な出品者には、与里・劉生をはじめ萬鉄五郎・高村光太郎・木村莊八・小島善太郎らがいた。同年雑誌『ヒュウザン』を創刊。翌年（1913）3月第2回展をフュウザン会展として開催したが、斎藤・岸田の間で主張が分れ、5月に解散、雑誌も第4号で廃刊した。この年、高村・劉生・木村・岡本帰一の4人はヴィーナス倶楽部で生活社展覧会を開催、これが草土社の前身となる。

无声会

むせいかい（026〜027収録・全2巻）

明治33年（1900）1月創立。自然主義を標榜し、結城明の主唱により集まった日本画の団体。平福百穂・福井江亭・島崎柳樹・石井柏亭・大森敬堂・渡辺香涯・結城素明の7名で結成された。いずれも東都円山派の泰斗、川端玉章の門下から巣立った画家たちである。洋風画を大胆に取り入れた作風を実験し、同年3月上野公園五号館で第1回展を開催、以降大正2年（1913）まで続く。小杉放庵・森田恒友・杉浦非水・川端龍子・橋口五葉・名取春仙らも参加。近代市民社会の実現志向に対応するような新しい傾向の芸術を、日本画の分野で初めて試みた団体として、日本画史上に果たした役割は大きい。

明治美術会

めいじびじゅつかい（008収録・全1巻）

明治22年（1889）に結成された日本最初の洋画家団体。会頭に、東京大学総長渡辺洪基（のち枢密顧問官田中不二麿、宮内次官花房義質が継ぐ）をむかえ、浅井忠・山本芳翠ら美術家の通常会員と、外山正一・林忠正・田中芳男らの賛助会員で構成された。同年10月、第1回展を東京上野公園池の端競馬場の馬具処で開催した。この展覧会は、森鷗外などの本格的な美術評論を誘発した展覧会として記憶されている。1回展は秋に開かれ、以後は毎年春に開かれるのが慣例となり（第6・7回は秋）、29年（1896）は開けなかったが、33年（1900）の11回展まで続けられた。また、第1回展からの各国・各時代にわたる参考品の陳列は、その後の各団体展にあまり見ないところであり、毎年入場者を啓蒙するものであったらしい。



萩寺（石井柏亭）



牛乳（松島 郎）



赤い背景（児島善三郎）

【第1 回配本・全12巻】 ● 揃定価176,400円 (本体168,000円)

A5 判上製 ISBN4-8433-0285-6 C3371

◆内国絵画共進会 全4巻 【解説】佐藤道信

揃定価53,550円 (本体51,000円) ISBN4-8433-0286-4

001. 第一回絵画出品目録 (明治15年) ほか
定価12,600円 (本体12,000円) ISBN4-8433-0287-2

002. 第一回出品画家人名一覧・審査報告 (明治16年) ほか
定価12,600円 (本体12,000円) ISBN4-8433-0288-0

003. 第二回絵画出品目録 (明治17年) ほか
定価13,650円 (本体13,000円) ISBN4-8433-0289-9

004. 第二回出品人略譜・報奨授与人名表 (明治17年) ほか
定価14,700円 (本体14,000円) ISBN4-8433-0290-2

◆観古美術会 全3巻 【解説】佐藤道信

揃定価40,950円 (本体39,000円) ISBN4-8433-0291-0

005. 第一回観古美術会出品目録 (明治13年)
第一回観古美術会写真ほか
定価12,600円 (本体12,000円) ISBN4-8433-0292-9

006. 観古美術会聚英 (明治13年)
第二回観古美術会出品目録 (明治14年) ほか
定価12,600円 (本体12,000円) ISBN4-8433-0293-7

007. 第三～七回観古美術会出品目録 (明治15年～19年) ほか
定価15,750円 (本体15,000円) ISBN4-8433-0294-5

◆明治美術会 全1巻 【解説】青木茂

008. 明治美術会出品目録 (明治22年～31年) ほか
定価17,850円 (本体17,000円) ISBN4-8433-0295-3

◆太平洋画会 全4巻 【解説】青木茂

揃定価64,050円 (本体61,000円) ISBN4-8433-0296-1

009. 太平洋画会カタログ (明治35年～39年) ほか
定価14,700円 (本体14,000円) ISBN4-8433-0297-X

010. 太平洋画会カタログ／画集 (明治41年～45年) ほか
定価17,850円 (本体17,000円) ISBN4-8433-0298-8

011. 太平洋画会出品目録 (大正2年～昭和8年) ほか
定価17,850円 (本体17,000円) ISBN4-8433-0299-6

012. 太平洋画会出品目録 (昭和9年～19年) ほか
定価13,650円 (本体13,000円) ISBN4-8433-0300-3

【第2 回配本・全13巻】 ● 揃定価235,200円 (本体224,000円)

A5 判上製 ISBN4-8433-0435-2 C3371

◆白馬会 全3巻 【解説】山梨絵美子

揃定価34,650円 (本体33,000円) ISBN4-8433-0439-5

013. 白馬会 第1巻 (明治29年～34年)
定価8,400円 (本体8,000円) ISBN4-8433-0436-0

014. 白馬会 第2巻 (明治35年～38年)
定価15,750円 (本体15,000円) ISBN4-8433-0437-9

015. 白馬会 第3巻 (明治40年～44年)
定価10,500円 (本体10,000円) ISBN4-8433-0438-7

◆日本美術協会 全10巻 【解説】鈴木廣之

揃定価200,550円 (本体191,000円) ISBN4-8433-0449-2

016. 日本美術協会 第1巻 (明治21年～22年)
定価18,900円 (本体18,000円) ISBN4-8433-0440-9

017. 日本美術協会 第2巻 (明治22年～24年)
定価22,050円 (本体21,000円) ISBN4-8433-0441-7

018. 日本美術協会 第3巻 (明治25年～26年)
定価22,050円 (本体21,000円) ISBN4-8433-0442-5

019. 日本美術協会 第4巻 (明治27年～29年)
定価19,950円 (本体19,000円) ISBN4-8433-0443-3

020. 日本美術協会 第5巻 (明治30年～33年)
定価16,800円 (本体16,000円) ISBN4-8433-0444-1

021. 日本美術協会 第6巻 (明治34年～36年)
定価17,850円 (本体17,000円) ISBN4-8433-0445-X

022. 日本美術協会 第7巻 (明治37年～41年)
定価22,050円 (本体21,000円) ISBN4-8433-0446-8

023. 日本美術協会 第8巻 (明治42年～大正6年)

定価19,950円 (本体19,000円) ISBN4-8433-0447-6

024. 日本美術協会 第9巻 (大正7年～8年)

定価16,800円 (本体16,000円) ISBN4-8433-0448-4

025. 日本美術協会 第10巻 (大正8年～昭和17年)

定価24,150円 (本体23,000円) ISBN4-8433-0486-7

【第3 回配本・全10巻】 ● 揃定価126,000円 (本体120,000円)

A5 判上製 ISBN4-8433-0555-3 C3371

◆无声会 全2巻 【解説】庄司淳一

揃定価19,950円 (本体19,000円) ISBN4-8433-0556-1

026. 无声会 第1巻 (明治33年～34年)
定価10,500円 (本体10,000円) ISBN4-8433-0557-X

027. 无声会 第2巻 (明治35年～大正2年)
定価9,450円 (本体9,000円) ISBN4-8433-0558-8

◆烏合会 全1巻 【解説】関千代

028. 烏合会 全1巻 (明治34年～45年)
定価11,550円 (本体11,000円) ISBN4-8433-0559-6

◆光風会 全5巻 【解説】岩瀬行雄

揃定価72,975円 (本体69,500円) ISBN4-8433-0560-X

029. 光風会 第1巻 (明治45年～大正12年)
定価13,650円 (本体13,000円) ISBN4-8433-0561-8

030. 光風会 第2巻 (大正13年～昭和6年)
定価14,700円 (本体14,000円) ISBN4-8433-0562-6

031. 光風会 第3巻 (昭和7年～10年)
定価16,275円 (本体15,500円) ISBN4-8433-0563-4

032. 光風会 第4巻 (昭和11年～13年)
定価15,750円 (本体15,000円) ISBN4-8433-0564-2

033. 光風会 第5巻 (昭和14年～19年)
定価12,600円 (本体12,000円) ISBN4-8433-0565-0

◆フウザン会・草土社 全2巻 【解説】田中 淳

揃定価21,525円 (本体20,500円) ISBN4-8433-0566-9

034. フウザン会／草土社 第1巻 (大正元年～5年)
定価11,550円 (本体11,000円) ISBN4-8433-0567-7

035. フウザン会／草土社 第2巻 (大正6年～11年)
定価9,975円 (本体9,500円) ISBN4-8433-0568-5

【第4 回配本・全16巻】 ● 揃定価243,600円 (本体232,000円)

A5 判・B5 判上製 ISBN4-8433-0746-7 C3371

◆二科会 全12巻 【解説】尾崎真人

揃定価189,000円 (本体180,000円) ISBN4-8433-0747-5

〔二科会 目録編〕 全6巻 A5 判上製
揃定価88,200円 (本体84,000円) ISBN4-8433-0813-7

036. 二科会 目録編 第1巻 (大正3年～昭和元年)
定価14,700円 (本体14,000円) ISBN4-8433-0748-3

037. 二科会 目録編 第2巻 (昭和2年～5年)
定価12,600円 (本体12,000円) ISBN4-8433-0749-1

038. 二科会 目録編 第3巻 (昭和5年～8年)
定価16,800円 (本体16,000円) ISBN4-8433-0750-5

039. 二科会 目録編 第4巻 (昭和9年～11年)
定価15,750円 (本体15,000円) ISBN4-8433-0751-3

040. 二科会 目録編 第5巻 (昭和12年～14年)
定価14,700円 (本体14,000円) ISBN4-8433-0752-1

041. 二科会 目録編 第6巻 (昭和15年～18年)
定価13,650円 (本体13,000円) ISBN4-8433-0753-X

〔二科会 画集・図録編〕 全6巻 B5 判上製
揃定価100,800円 (本体96,000円) ISBN4-8433-0814-5

042. 二科会 画集・図録編 第1巻 (大正6年～昭和2年)
定価16,800円 (本体16,000円) ISBN4-8433-0754-8

043. 二科会 画集・図録編 第2巻 (昭和3年～8年)
定価16,800円 (本体16,000円) ISBN4-8433-0755-6

044. 二科会 画集・図録編 第3巻 (昭和9年~10年)
定価18,900円 (本体18,000円) ISBN4-8433-0756-4
045. 二科会 画集・図録編 第4巻 (昭和11年~13年)
定価17,850円 (本体17,000円) ISBN4-8433-0757-2
046. 二科会 画集・図録編 第5巻 (昭和13年~15年)
定価14,700円 (本体14,000円) ISBN4-8433-0758-0
047. 二科会 画集・図録編 第6巻 (昭和15年~18年)
定価15,750円 (本体15,000円) ISBN4-8433-0759-9
- ◆春陽会 全4巻 [解説] 田中 淳
揃定価54,600円 (本体52,000円) ISBN4-8433-0760-2
〔春陽会 目録編〕 全2巻 A5判上製
揃定価30,450円 (本体29,000円) ISBN4-8433-0815-3
048. 春陽会 目録編 第1巻 (大正12年~昭和7年)
定価14,700円 (本体14,000円) ISBN4-8433-0761-0
049. 春陽会 目録編 第2巻 (昭和8年~17年)
定価15,750円 (本体15,000円) ISBN4-8433-0810-2
〔春陽会 画集・図録編〕 全2巻 B5判上製
揃定価24,150円 (本体23,000円) ISBN4-8433-0816-1
050. 春陽会 画集・図録編 第1巻 (昭和9年~11年)
定価12,600円 (本体12,000円) ISBN4-8433-0811-0
051. 春陽会 画集・図録編 第2巻 (昭和12年~18年)
定価11,550円 (本体11,000円) ISBN4-8433-0812-9
- 【第5回配本・全5巻】 ●揃定価80,850円 (本体77,000円)
A5判上製 ISBN4-8433-0973-7 C3371
- ◆白日会 全4巻 [解説] 田中 淳
揃定価60,900円 (本体58,000円) ISBN4-8433-0979-6
052. 白日会 第1巻 (大正14年~昭和6年)
定価15,750円 (本体15,000円) ISBN4-8433-0974-5
053. 白日会 第2巻 (昭和7年~11年)
定価15,750円 (本体15,000円) ISBN4-8433-0975-3
054. 白日会 第3巻 (昭和11年~13年)
定価14,700円 (本体14,000円) ISBN4-8433-0976-1
055. 白日会 第4巻 (昭和14年~19年)
定価14,700円 (本体14,000円) ISBN4-8433-0977-X
- ◆国民美術協会 全1巻 [解説] 山梨絵美子
056. 国民美術協会 (大正2年~昭和8年)
定価19,950円 (本体19,000円) ISBN4-8433-0978-8
- 【第6回配本・全11巻】 ●揃定価191,100円 (本体182,000円)
A5判上製 ISBN4-8433-1036-0 C3371
- ◆国民美術協会主催展 全3巻 [解説] 山梨絵美子
揃定価51,450円 (本体49,000円) ISBN4-8433-1037-9
057. 国民美術協会主催展 第1巻 (大正12年~14年)
仏蘭西現代美術展
定価13,650円 (本体13,000円) ISBN4-8433-1038-7
058. 国民美術協会主催展 第2巻 (大正15年~昭和17年)
独逸現代美術展、朝鮮名画展、民俗工芸展、ラブラード回顧展、エミール・ベルナル回顧展、富岡鉄斎作品展覧会
定価18,900円 (本体18,000円) ISBN4-8433-1039-5
059. 国民美術協会主催展 第3巻 (昭和3年~10年)
松方正義蒐集品展 (第1回~第4回)、時代タペストリー展覧会
定価18,900円 (本体18,000円) ISBN4-8433-1040-9
- ◆国画創作協会 全2巻 [解説] 上園四郎
揃定価38,850円 (本体37,000円) ISBN4-8433-1041-7
060. 国画創作協会 第1巻 (大正7年~15年)
定価18,900円 (本体18,000円) ISBN4-8433-1042-5
061. 国画創作協会 第2巻 (大正15年~昭和3年)
定価19,950円 (本体19,000円) ISBN4-8433-1043-3
- ◆国画会 全3巻 [解説] 島田康寛
揃定価46,200円 (本体44,000円) ISBN4-8433-1044-1

062. 国画会 第1巻 (昭和4年~9年)
定価16,800円 (本体16,000円) ISBN4-8433-1045-X
063. 国画会 第2巻 (昭和10年~14年)
定価15,750円 (本体15,000円) ISBN4-8433-1046-8
064. 国画会 第3巻 (昭和15年~19年)
定価13,650円 (本体13,000円) ISBN4-8433-1047-6
- ◆日本自由画壇 全3巻 [解説] 吉中充代
揃定価54,600円 (本体52,000円) ISBN 4-8433-1048-4
065. 日本自由画壇 第1巻 (大正9年~13年)
定価17,850円 (本体17,000円) ISBN4-8433-1049-2
066. 日本自由画壇 第2巻 (大正13年~昭和3年)
定価19,950円 (本体19,000円) ISBN4-8433-1050-6
067. 日本自由画壇 第3巻 (昭和4年~11年)
定価16,800円 (本体16,000円) ISBN4-8433-1051-4
- 【第7回配本・全6巻】 ●揃定価110,250円 (本体105,000円)
A5判上製 ISBN4-8433-1201-0 C3371
- ◆日本南画院 全5巻 [解説] 鶴見香織
揃定価95,550円 (本体91,000円) ISBN4-8433-1202-9
068. 日本南画院 第1巻 (大正10年~13年)
定価15,750円 (本体15,000円) ISBN4-8433-1203-7
069. 日本南画院 第2巻 (大正14年~昭和2年)
定価19,950円 (本体19,000円) ISBN4-8433-1204-5
070. 日本南画院 第3巻 (昭和3年~5年)
定価21,000円 (本体20,000円) ISBN4-8433-1205-3
071. 日本南画院 第4巻 (昭和6年~8年)
定価21,000円 (本体20,000円) ISBN4-8433-1206-1
072. 日本南画院 第5巻 (昭和9年~11年)
定価17,850円 (本体17,000円) ISBN4-8433-1207-X
- ◆自由美術家協会・美術創作作家協会 全1巻 [解説] 大谷省吾
073. 自由美術家協会/美術創作作家協会 (昭和12年~19年)
定価14,700円 (本体14,000円) ISBN4-8433-1208-8
- 【第8回配本・全9巻】 ●揃定価113,400円 (本体108,000円)
A5判・B5判上製 ISBN4-8433-1553-2 C3371
- ◆一九三〇年協会/槐樹社 全1巻 [解説] 柳沢秀行/小林未央子
074. 一九三〇年協会/槐樹社 (大正15年~昭和5年/大正13年~昭和6年)
定価8,400円 (本体8,000円) ISBN4-8433-1554-0
- ◆独立美術協会 全6巻 [解説] 大谷省吾
揃定価77,700円 (本体74,000円) ISBN4-8433-1555-9
- 〔独立美術協会 目録編〕 全3巻 A5判上製
揃定価33,600円 (本体32,000円) ISBN4-8433-1556-7
075. 独立美術協会 目録編 第1巻 (昭和6年~10年)
定価12,600円 (本体12,000円) ISBN4-8433-1557-5
076. 独立美術協会 目録編 第2巻 (昭和11年~14年)
定価10,500円 (本体10,000円) ISBN4-8433-1558-3
077. 独立美術協会 目録編 第3巻 (昭和15年~18年)
定価10,500円 (本体10,000円) ISBN4-8433-1559-1
- 〔独立美術協会 画集・図録編〕 全3巻 B5判上製
揃定価44,100円 (本体42,000円) ISBN4-8433-1560-5
078. 独立美術協会 画集・図録編 第1巻 (昭和6年~9年)
定価13,650円 (本体13,000円) ISBN4-8433-1561-3
079. 独立美術協会 画集・図録編 第2巻 (昭和10年~14年)
定価14,700円 (本体14,000円) ISBN4-8433-1562-1
080. 独立美術協会 画集・図録編 第3巻 (昭和15年~18年)
定価15,750円 (本体15,000円) ISBN4-8433-1563-X
- ◆一水会 全1巻 [解説] 佐藤香里 A5判上製
081. 一水会 (昭和12年~18年)
定価16,800円 (本体16,000円) ISBN4-8433-1564-8
- ◆美術文化協会 全1巻 [解説] 大谷省吾 A5判上製
082. 美術文化協会 (昭和15年~20年)
定価10,500円 (本体10,000円) ISBN4-8433-1565-6

近代日本アート・カタログ・コレクション 全82巻

〔監修〕青木 茂 〔編集〕東京文化財研究所 ●揃定価1,276,800円（本体1,216,000円）ISBN4-8433-0284-8 C3371

〈近代日本アート・カタログ・コレクション〉は、明治初年から第二次世界大戦前までに開催された美術展に際して刊行された資料を集成するものです。これらには、作品目録・図版・関係論文・作品解説・年譜などが含まれており、美術史研究には欠かせない資料といえます。しかし、今日と同様に当時も、会期中に会場で販売され、書店などの通常の流通経路にのらないため、図書館・研究機関などでの所蔵が極めて少ないのが現状です。本企画は公共機関・私立の団体・個人等の所蔵者のご厚意のもとに復刻集成の運びとなったものです。

海外に流出した日本の美術品や、関東大震災や第二次世界大戦の災禍により失われた美術作品を辿ることが出来るほか、新たに発掘された作品を固定する材料でもあります。何をつくり、集め、それらがどう評価されたのか、また美術が社会にどのように受け容れられてきたかという見取図は、個々の作品・作家からだけでは得られません。開化以来、西洋文化の強い影響を受けた日本文化が、伝統の上に近代化されていく過程を探求することが出来る、もっとも基礎的な資料です。

特 色

- 明治から昭和初期にかけて活躍した24の主要美術団体の展覧会関係資料を集成。出品目録・図版・関係論文等々、近代美術史研究の基礎資料です。
- 団体・テーマごとに、気鋭の研究者による解説を付す。
- 災禍で失われたものや海外に流出したものにあたることが出来ます。
- 展覧会会場での限定販売のみのものが多いため、所蔵機関も極めて少なく、これまで閲覧が非常に困難であったものばかりです。

★解説者一覧

(50音順／肩書・所属は2004年10月現在のもの)

青木 茂

国際版画美術館館長・文星芸術大学教授

岩瀬行雄

美術史研究者・フリーエディター

上蘭四郎

笠岡市立竹喬美術館

大谷省吾

東京国立近代美術館

尾崎真人

京都市美術館

小林未央子

東京文化財研究所

佐藤香里

早稲田大学大学院

佐藤道信

東京芸術大学助教授

島田康寛

京都国立近代美術館

庄司淳一

宮城県美術館

鈴木廣之

東京文化財研究所

関 千代

東京文化財研究所名誉研究員

田中 淳

東京文化財研究所

鶴見香織

群馬県立近代美術館

柳沢秀行

大原美術館

山梨絵美子

東京文化財研究所

吉中充代

京都市美術館

●特にお薦めしたい方 美学・美術史・芸術学・文化史などの研究者・研究室。大学図書館。美術館。公共図書館。アートマネジメント関係者、美術館学芸員、キュレーター、ギャラリー経営者など。

関連企画のご案内

※表示価格には消費税が含まれています。

近代美術関係 第Ⅱ期・補遺篇 新聞記事資料集成

●全7リール揃定価280,000円（分売不可）
既刊分全71リールを補完。東京文化財研究所所蔵「国華倶楽部作成 諸新聞切り抜き帳」「諸新聞切り抜き帳」を収録。2004.11月刊行

近代美術関係 第Ⅰ期 新聞記事資料集成

●全71リール揃定価1,341,900円（分売不可）
東京芸術大学附属図書館所蔵「諸新聞切抜帖」351冊を底本に、明治24年～昭和16年までの美術関連の新聞記事をマイクロフィルムで集成。

近代美術新聞記事総覧

全16巻（予定）●各巻予価18,900～21,000円
マイクロフィルム版『近代美術関係新聞記事資料集成』の目録版ついに刊行。明治24年～昭和16年まで、日本の近代美術関係記事名を総覧。1巻に3年分（39000～54000件）を収録、全16巻の予定。2005.4月から配本開始予定

近代美術雑誌叢書

全37巻・別巻1・別冊6 ●揃定価554,768円
〔監修〕青木 茂 日本近代美術の足跡をたどる基本資料。「大日本美術新報」「臥遊席珍」「東洋絵画叢誌」「美術評論」「龍池会報告」「明治美術会報告」「美術園」「美術週報」「美術旬報」「美術月報」「国民美術」を収録。

林忠正コレクション

全4巻・別巻1 ●揃定価155,400円 残部僅少
〔監修〕木々康子 欧州では日本美術の第一人者として、日本では印象派を中心とした西洋美術の紹介者として、両地の文化に多大な影響を与えた大美術商、林忠正の「林忠正蒐集西洋絵画図録」「Collection Hayash」を復刻。

稿本 日本帝国美術略史

●定価39,900円 〔監修・解説〕小路田泰直
1900年のパリ万国博覧会に出品された、帝室博物館編・農商務省刊行『稿本 日本帝国美術略史』を原寸大で復刻。日本人による「日本美術史」の嚆矢であり、林忠正に「この書すべてが日本である」と言わしめた名著。

※毎度ありがとうございます。お申し込みはぜひ当店へ。



〒101-0047 千代田区内神田2-7-6
TEL.03 (5296) 0491
FAX.03 (5296) 0493
http://www.yumani.co.jp/
e-mail eigyou@yumani.co.jp

取扱店

